免疫薬 筋肉多いと長続き

がん治療「オプジーボ」など

阪大チーム研究

「オプジーボ」などの新しいがん免疫治療薬の効果は、筋肉量が多い患者ほど長続きするという研究結果を、大阪大のチームがまとめた。「筋肉量が、薬の効果を予測する指標の一つになる可能性がある」としている。論文が英科学誌サイエンティフィック・リポーツに掲載された。

体内の免疫を活性化させてがんを攻撃するオプジーボや「キイトルーダ」は、一部の患者には劇的な効果があるが、どの患者に効くかを事前に予測することは難しかった。

チームは、オプジーボやキイトルーダの投与を受けた肺がん患者42人を対象にアジア人の平均的な筋肉量と比較し、筋肉量が多いグループと少ないグループに分け、薬の効果を調べた。

その結果、筋肉量が多いグループ（20人）では、薬の効果が7か月ほど続いたのに対し、筋肉量が少ないグループ（22人）は2か月ほどしか続かなかった。効果が1年以上続いた人の割合も、筋肉量が多いグループの方が多かった。

チームの白山敬之特任助教（呼吸器内科）は「筋肉からは、がんの増殖を抑える物質が分泌されているとの報告もある。治療効果を上げるため、運動などで筋肉量を維持する取り組みが大切になるかもしれない」と話す。

読売新聞

２０１９年（平成３１年）２月２３日(土)掲載

がん免疫薬効果、筋肉が左右

阪大

大阪大の熊ノ郷淳教授らは「オプジーボ」に代表されるがん免疫薬の効果が、患者の筋肉の量に左右されることを突き止めた。すでに筋肉量が低下した患者は、投薬後にがんが進行するリスクが、そうではない患者に比べて約3倍高くなった。高額ながん免疫薬の投与を続けるかどうか見分ける指標になる可能性がある。英科学誌「サイエンティフィック・リポーツ」電子版に21日発表した。

研究チームは30～80代の肺がん患者42人について、腹部の筋肉量をコンピューター断層撮影装置（CT）で観測し、治療効果との関係を追跡調査した。投与後に筋肉量が低下しない患者は効果が高かった。がん免疫薬は治療が難しかったがんに劇的に効くものの、投与した2～3割の患者にしか効かない問題がある。

日本経済新聞

２０１９年（平成３１）年２月２２日（金）掲載